

二〇二二年五月二日

梅雨滂沱庭木に一羽濡れ雀

せいじ

福耳の帽子はみ出す新入生

みきお

雨に伏す紫陽花剪つて玄関に

こすもす

新緑の奥へ奥へと朱燈籠

凡士

花嫁のブーケを投げし椰子の影

そうけい

子雀の束の間宿る梅雨の軒

あひる

梅雨寒し留守電に知る訃報かな

せいじ

二〇二二年五月二〇日

梅雨寒しホットレモンをお代りす

満天

梅雨滂沱どこへも行かず誰も来ず

菜々

終点の無人改札つばくらめ

豊実

パゴダ塔覆ひ居座る梅雨の雲

素秀

夕帳まとふ空木の白さかな

明日香

ごめ群れて夏の潮満つ船溜り

凡士

巣箱掛く櫛の梢に風通ふ

なつき

二〇二二年五月一九日

雨しづく若葉をトランポリンとす

せいじ

笹の葉を杓として汲む岩清水

みきお

雨晴れて葉裏へ急ぐかたつむり

智恵子

二〇二二年五月一八日

茅葺きの一軒残る青田かな

みきお

雨意知りて片目を出しぬ蝸牛

明日香

峡谷の緑へトロッコ列車行く

凡士

二〇二二年五月一七日

大樹影どくだみ十字重ねけり

ぼんこ

二の腕に長子の気骨代田搔く

菜々

万緑に集ひおしゃべりしたきかな

なおこ

新緑の木洩日突きて太極拳

凡士

終電を守宮と待ちし無人駅

素秀

代田いま父祖の山々映しけり

菜々

干シ一ツ風に機嫌や五月晴

智恵子

連獅子のごと藪揺らぐ青嵐

明日香

二〇二二年五月一六日

ブラウスはペンギン柄や夏に入る

あひる

手裏剣のごとき花置く山法師

せいじ

句を詠めと我を励ます河鹿かな

明日香

大粒の雨いなしをる雪の下

むべ

二〇二二年五月一五日

蜘蛛の囲や放置自転車撤去中

たか子

千枚の代田整ひ一枚に

みきお

乙女らの二の腕まぶし夏来る

菜々

麦の秋四方に展けし古墳山

たかを

風薫る祈りの道をもとほれば

むべ

青嵐藪天井に穴を開け

もとこ

釣舟の舳先を小突く卯月波

みきお

毎日句会みのある選・二〇二二年五月三日